

## 廣岡家の金融史

豪商・廣岡家の視点から日本金融市場の変遷をたどってみた

米の取引市場から証券取引市場が生まれ、大名の資金調達市場として機能する

そこでは、より手広に投機取引を行ないたいという思惑から、デリバティブ取引まで生み出された

大名の資金調達は、個別商家と大名との相対取引によっても行われ、そこでは、現代で言うシンジケートローンの仕組みや「リレーションシップ」貸し出し改革というべき戦略も見られた

明治維新後は、銀目廃止、藩債処分などの激動をへて、近代的銀行業や保険業が確立した教科書で学ぶ金融史としては、この経緯を踏まえて「日本の金融市場は江戸時代に一定程度の発展を見せ、明治維新後には、近代的金融市場が勃興した」と理解すれば良いのかもしれない

しかし、廣岡家の目を通して変化を追体験したとき、そのように淡白に整理してよいものでは決してなかったことがわかる

ここで改めて、廣岡家の歩んだ道のを振り返ってみたい

間違いなく、廣岡家の繁栄は、江戸時代に極まっていた

江戸時代における廣岡家の実現した交渉と呼ぶにふさわしい繁栄は、何によってもたらされたものだったのだろうか

初代加久の起業家精神、四代加久の経営哲学など、属人的な要素を上げることもできようが、加久が江戸時代の経済構造にうまくフィットする形でビジネスを展開した形態であったこと、この一転に集約されるのではないだろうか

江戸時代の経済構造は以下である

米現物が年貢として徴収され、大阪を代表とする市場に輸送されたのちに販売され、その代金が各地に送金されて各種支出に充てられる

参勤交代によって江戸と國本の二重生活を強いられていた大名にとって、米年貢の販売はもとより、販売代金の送金もまた重要な関心ごとであった

かかる経済構造の下で、江戸・大阪・大名領の三点を結ぶお金の流れを握ったのは、大阪商人だったのであり、その代表的存在の一つが加久であった

もちろん、加久は最初からその地位にいたわけではない

米商人として徐々に大名の年貢米を扱う商家として成長して行った結果、諸大名に包括的な金融サービスを提供する商家「館入」（たちいり）にまで成長した

萩藩、津和野藩、中津藩に対して加久が提供したサービスは、定例・臨時の資金融通、産物売り捌きの代行、ないし斡旋、そして、おそらく送金であった

送金サービスについて「おそらく」と留保をつけたのは、顧客となった大名の資金を加久がどのように動かしたのか、十分に明らかにし得ていないからである

実は、江戸時代の加久は大阪以外に店舗を持っておらず、したがって、自前の送金ネットワークを持っていなかった

それでも問題なく大名御用を務めることができたのは、江戸時代中期以降になると江戸・大阪間の為替輸送をサービスとして提供する両替屋が増えており、それを利用することができたからであったと考えられる

この点、17世紀までは江戸・大阪間の物資輸送を自前で行っていた鴻池屋善右衛門などの豪商とは異なっている

鴻善は江戸に支店を持ち、貨幣送金ネットワークを持っていたと考えられるのに対し、

加久は大阪に腰を据えて、大名に対して包括的な金融サービスを提供していた

加久の強みは大阪の強みであり、大阪が諸大名のモノ・カネの流れを司る重要な市場であり続ける限り、それは加久にとっての「富の源泉」でありつづけたのである

### 明治維新後の廣岡家

大阪に腰を据え、おのずと集まってくる米や諸々の産物を抑えて、大名から金利を受け取るそのための手練手管に長けていた廣岡家であったが、**明治維新という大きな構造変化によって、富の源泉を失うことになる**

1873年の藩債処分によって辛くも旧大名への融資額の一部を回収できたものの、**大名に対する包括的な金融サービスを提供するというビジネスモデルが失われたこと**に変わりはない

廣岡家は維新政府の臨時の借入金である会計基立金として、1868、1869両年で約2万両もの出金を行っているが、かつて大名に対して提供したような金融サービスを明治政府に対して提供することはなかった

旧萩藩（毛利家）との関係性を考えれば、政府要路に接近し、政府御用を受け負うこともできたであろうに、**史料で確認できる限りでは、そのような動きは見いだせない**

**明治政府が必要とした金融サービスは、三井・島田・小野といった送金ネットワークを有する商家によって担われ、それも最終的には日本銀行が中央官庁および府県の官公預金を管理する体制に収斂して行った**

江戸時代は送金サービスそれ自体を請け負う事の無かった廣岡家は、**時代の変化に適応すべく岡山藩の為替方と言う「新事業」を手掛けているが、この流れのなかでは長続きするはずもなかった**

では、大名に代わる新たな資金需要者として浮上してきた「会社」に対して、金融サービスを提供するビジネスに移行することはできたのであろうか

**明治期以降の新しく重要な資金需要者となった会社に対する資金供給の方法は、有価証券投資を介した直接金融と銀行融資を介した間接金融に大別される**

廣岡家は、1888年設立した合資会社加島銀行をはじめとして、1895年に加島貯蓄銀行、

1902年に大同生命保険会社、1926年に加島信託会社と複数の近代的な金融事業を展開させて有価証券投資や銀行融資を行ってきた

しかし、江戸時代から金融事業を営んできた商家の多くは、明治期に近代的な金融事業者へ転身したものであっても、保守的な経営を行ない、積極的にリスクを取った工業投資や融資を避ける傾向にあった

家憲で資産維持を重視し、事業の将来性より安定性を優先した保守的な経営を行った鴻池家は、そうした商家の典型的な事例であり、廣岡家もその例に漏れることはなかった

### 昭和金融恐慌をへて保険業へ

加島銀行は、1917年に株式会社に改組し、さらに加島貯蓄銀行を吸収合併するなど、1910年代後半から20年代にかけて急膨張した

そうした拡張時期と金融業界に大打撃を与えた昭和金融恐慌とが重なり、多額の預金を流出させた加島銀行は、経営状態が急激に悪化し、経営の建て直しは、もはや不可能となった。そして、破綻が確定したのち、廣岡家は、加島銀行の破綻清算処理が金融業者としての信用を損なわないよう、すなわち、債権者や株主ができる限り損害を被らないように対応する事を迫られたのである

江戸時代から廣岡家が所有していた書画・骨董、茶道具を大量に手放し、さらに、財産管理会社の廣岡合名会社が所有する株式や廣岡家の人々が個人的に持っていた資産までも提供する、といった努力の甲斐もあって、幸いにも廣岡家の評判が大きく下がることはなかった。昭和金融恐慌後も順調な発展を遂げていった廣岡の経営する大同生命保険会社の存在こそが、その証左である

大同生命が廣岡家のオーナー企業となり、組織内部が一枚岩となって迅速かつ効率的に決定を行い得たことが、この発展を支えた

それは、皮肉にも加島銀行の破綻によって、廣岡家の人材が大同生命の経営により集中できるようになったことで加速したのである

### 生き残った家・生き残れなかった家

こうして、明治維新以降の廣岡家は、江戸時代に築き上げたような強固なビジネスモデルを築くことができないうまま、昭和金融恐慌の荒波を経て、かつてのような財界における影響力を失ってしまった

しかし、これは廣岡家に限ったことではない

加久や鴻善と並んで大阪を代表する豪商であった加島屋作兵衛（長田家）は、明治維新後に倒産の憂き目に遭っている豪商と呼ばれた家ですら、明日をも知れぬ状態であったのだから、それ以外の商家は言わずものがなである

事実、江戸時代以来の両替屋のうち、明治以降も存続した家は少数であったことが確認されているし、両替屋以外でも江戸時代から明治・大正・昭和にかけて、経営体として連続した「家」はごく少数であり、明治維新や昭和（金融）恐慌によって多くが倒産を余儀なくされたことが明らかにされている

その中であって、経営を連綿と続けている家に共通することは、意外にも事業内容を変更していることだという

ここからは、江戸時代以来の事業内容を否定するほどの改革を断行した家が生き残っているのではないかとの仮説を立てている

あくまでも仮説に留まると言え、事業整理と近代化、組織改革を行うことで財閥へ転身を遂げた三井や住友の事例とも整合的であるし、廣岡家に当てはめてみても首肯できる点が少なくない

廣岡家の栄達は、米仲買から蔵元、蔵元から大名貸へ、という業態変化によって実現した米そのものを取り扱う米市場から、米切手を取引する証券市場へと大阪市場が変容して行く中で、四代加久は「米切手巧者」の名を得た

そして、旺盛な資金需要を持っていた大名を相手とするビジネスで豪商へと飛躍した

以上は、金融市場の変化に巧に対応して行った結果であると評価できる

一方、廣岡家の衰退は、大名貸から近代的銀行への業態変化が遅れたことによってもたらされた面がある

新時代の金融市場に求められるサービスを提供する役割を十分に果たすことができないまま、昭和金融恐慌を迎えている

それでも、廣岡家が財界に名を残すことができたのは、保険業という新事業への移行が契機となっている

資金源を保険料とし、資産運用は少額分散投資、または不動産担保貸付という長期的かつロリスク・ロリターンのビジネスを志向した大同生命の経営方針（加入者優先、堅実経営）には、江戸時代に廣岡家が行ってきた長期的に投資を回収するというビジネスモデルが、多少なりとも残っていたと評価できるかもしれない

## 豪商の金融史に何を学ぶか

大同生命を存続させる

廣岡家の念願は見事に果たされた

しかし、改めて廣岡家が辿った歴史から、日本金融資を眺めた場合、明治維新という構造変化の甚大なること、その変化について行くことの難しさを思い知らされる

廣岡家と同じく明治維新後に、かつての勢いを失った家である鴻池屋善右衛門を例として、先学が導き出した結論は、市場環境の急激な変化に対応しようとしたものの、巨額の家産を保有していただいだけ、それを守ろうとする意識が強く新時代へ積極的に投じていく姿勢に欠

けていたというものである

そうした消極性・保守性をもたらした要因として、家政機構の問題が指摘されている

すなわち、経営を番頭・手代・丁稚に委ね、分家・別家を多数抱える中で、家長の没個性化が進み、思い切った改革を断行する際に、桎梏となったのではないかとの指摘である

このように、鴻池屋善右衛門が明治維新後に辿った歴史は、同じく江戸時代の豪商であった三井・住友が外部から優れた経営者を招き、思い切った改革を進めたのとは対照的に描かれてきた

そして、この描き方は維新後の廣岡家にも概ね当てはまることのできる

保険業への進出は功を奏したものの、銀行経営にみられた消極性は否めず、また、ふれていないが家政機構の整理に廣岡家が苦心した点も共通する

廣岡家もかつてほどではなかったにせよ、藩債処分を切り抜けて、明治維新前後で家産をそれなりに連続させていた

人も然りである

例えば、幕末以来、加久の経営を支えた加輪上勢七は、加島銀行も支えた

したがって、カネ・ヒト・経営のノウハウは、いずれも明治以降に継承されたはずである

それにもかかわらず、加島銀行には、かつて大名に対して展開したような包括的金融サービスを融資先の企業に対して提供した形跡が見られなかった

なぜか

家政機構の在り方に起因する消極性・保守性も重要な要素であろうが、市場環境の変化を質的な変化も踏まえる必要があるのではないか

融資先が大名から「会社」に変わっただけ、後世の我々にはそう見えてしまうが、当事者にとっては、同じではなかったのではないか

大名貸経営と近代的な銀行経営で決定的に異なるのは、融資先の経営構造である

江戸時代の大名の中には、特産物の生産奨励を試みたが家も少なくないと言え、基本的には米納年貢を基軸に、財政を成り立たせている家が多かった

廣岡家をはじめとする大名貸商人は、究極的にはこの年貢収入を引き当てとして、融資を行ない、特に返済猶予などを認めつつも、大阪にいながらにしてモニタリングを続け、長期的には融資した額以上の利子を受け取り、資産額を順調に増やしていた

一方、近代的銀行は、融資先企業の事業内容を評価して貸し付ける必要がある

企業は、大名と違って年貢などの恒常的な収入の保障はないが

それゆえ、企業に融資を行う場合には、事業内容を精査し、融資を行う必要がある

しかも、その事業内容とは、江戸時代には存在しなかった新しい事業であり、それを評価し、リスクをとって融資するだけの力量が廣岡家にはあったのか、が焦点となる

保険業への進出に関しては、評価されるべきであるが、銀行業についていえば、廣岡家は、新規事業に融資を行う積極性ももちあわせていたとは、評価できない

これは、保守性によると言うよりも、そうした傾向は、少なからずあったにせよ、江戸時代

の大名の経営内容を把握し、元利払いを求めるための手練手管が、大名貸とは、似て非なる近代的銀行業において、通用しなかったことが大きかったのではないか

それは、加島銀行の拡大期であった1920年前半に行った新規融資の失敗の不始末の事例からも推察できる

年貢という恒常的収入が期待でき、それが大阪に運ばれて換金されるという構造の下では、大阪に腰を据え、大名の財政担当役員と膝をつきあわせて談判し、融資するというビジネスモデルは成り立ち得た

一定以上の規模を誇る豪商であれば、大名に対して交渉力を発揮することもできたであろう

また、廣岡家が「館入」を務めた家ではなかったが、細川家（熊本藩）は、財政が苦しい局面では、領内で借入を行ったり、寄付金（寸志）を募集したりすることで、大阪での借金返済を実現していた

つまり、細川家は年貢のみならず、領民の経済力も返済の原資として組み込んでいたのである

この構造は、明治維新によって崩れ、廣岡家も含む、江戸期以来の豪商は、各種公債を保有して金利生活者となるが、全く新しい事業への融資を余儀なくされた

元々できていたことが、突然できなくなったのではなく、まったく新しい市場環境に直面していながら、その変化に対応できなかったことが、廣岡家も含む大阪の豪商が、かつての影響力を失った最大の要因であったと、ひとまず結論としておきたい

廣岡家・大同生命が残してくれた大量の史料と向き合うことで知見を得、それを論文・書籍の形で公表することを地道に繰り返して行く

その過程で、学術関係者はもちろん、実務の世界におられる方々と対話することを大切にし、問題関心を共有する人とともに、真相に向かって肅々と前進して行くことができれば良いと願う

以上